

巻頭のことば

浄土宗務総長 川中 光教

明治の廃仏毀釈の法難に際し、福田行誠師は「仏家の廃仏を悲しむは、寺塔の破壊を悲しむに非ず、衣食の減ずるを悲しむに非ず、官録を失するを悲しむに非ず。只天人に此至善の道を失するを悲しむなり。僧侶の興法を念じ、廃仏を防ぐ、只これが為なり。」と表して持戒堅固を訴え、仏教本来に立ち返って護持復興を叫ばれた。以降、近代浄土宗史に燦然と名を遺す先師方を筆頭に学僧が競い合い力を合わせ、新しい学問を構築し書物を著して浄土宗を復興して下さった。七百年大遠忌には浄土宗全書が纏められ、大正時代には他宗から「学問宗の浄土宗」と評された。

時代は下り令和の現代、我々も新たな課題に向き合わなければならない。科学信仰、経済信仰、情報信仰と言いつつ表すことができそうなほどに人類生活の注目は傾き、寺院は観光資産、地域資産、生活儀礼としてわずかに面目を

保つだけで宗教本来の役割が失われつつある。

我々は今、現代浄土宗が誇る学僧諸師の名を連ねて開宗八百五十年を機にこの本を後世に遺そうと思う。人間本来の苦悩に苛まれ本当の救いを求める人に、法然浄土教が安心を与え起行を示すことを、また末法万年後の輪廻生死の衆生に念仏の救いを示すという使命を果たせることを願って。